

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：21403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K02543

研究課題名(和文) 北方圏の風土を生かした資質・能力育成の基盤研究：北欧との造形教育交流と比較から

研究課題名(英文) Fundamental research on developing qualities and abilities that take advantage of the northern climate: Comparative research through art education exchange between Northern Europe and Japan

研究代表者

尾澤 勇 (OZAWA, Isamu)

秋田公立美術大学・美術学部・教授

研究者番号：60712940

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「北方圏の風土を生かした資質・能力育成の基盤研究：北欧との造形教育交流と比較から」という題名である。フィンランドと北日本(秋田)の生徒の造形教育の交流美術展の開催を通して作品制作を行うことで、「北方圏に共通して見られる文化を学ぶこと」(一般的共通性)、「北日本とフィンランドに見られる差異を通して自己の地域を見つめ直すこと」(地域的特殊性)の両方の視点を行き来することでふるさとや自分を深く見つめアイデンティティの育成に繋がるという仮説の基に実践(交流展開催など)し研究の深化を図った。相互交流実践過程や成果物などの内容を分析し質的な深化方法を明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

フィンランドは日本の美術教育のルーツの一つである。1800年代に世界に先駆け、小学校に手工(工作)教育が導入された。冬の長い北国の家庭で育まれてきた手仕事を通じた先祖からの文化の継承が産業革命により失われたことにより、学校において、手仕事を通じた人間教育が取り入れられた。今日、フィンランドと北国秋田との造形教育を介した交流を通して、お互いに自分の郷土のよさや美しさ、自分自身を見つめ、郷土人材のアイデンティティを育成する基礎研究は社会的意義が強い。特に北国の人口減は著しく、若者の人口流失が止まらない。人口が少なくても、自分のふるさととの本質的なよさに気づける資質・能力の育成は喫緊の課題である。

研究成果の概要(英文)：The title of this research is "Fundamental research on developing qualities and abilities that take advantage of the northern climate: Comparative research through art education exchange between Northern Europe and Japan." Through the creation of works for the "Finland and Akita" educational exchange art exhibition, students learned about (1) "the culture common to the northern regions" and (2) "the cultural differences between Akita and Finland". We hypothesized that by doing so, students would be able to look deeply into their hometowns and themselves and develop their own identities. To this end, we conducted practical activities (such as holding exchange exhibitions) to deepen our research. By analyzing the contents of the mutual exchange practice process and artifacts, we were able to clarify methods for qualitatively deepening the interaction.

研究分野：社会科学

キーワード：フィンランドと日本の美術教育交流展 北方圏に共通する育成すべき資質・能力 一般的共通性と地域的特殊性の比較 ふるさとや自分のよさに気づく 郷土のアイデンティティの育成

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

(1) 平成 26 年度、フィンランドの教育研究で訪れたフィンランドの中学校教諭から、日本の中学校との交流を打診され、秋田とフィンランドの中学校の教諭同士の橋渡しを行うことから始まる。平成 27 年より両国の生徒が同一テーマを基に交流展を両国で開催する教育活動等を通して人材育成を行ってきた。これまでの両国の教育交流の過程で、自然環境や風土、文化面、造形面などの共通性と相違点について、郷土文化のよさや美しさについて実感をもって捉えられるように教育実践研究を重ねてきた。それまでの交流展は「交流展開催をして、ふるさとや生徒自身が自分自身を知ること」に重きを置いて活動実践を行っていたものの、その都度両国の教員が話し合って実践内容を決めていた。有意義な国際交流を通じた人材育成であることから、今までの実践研究を北方圏ならではの、人材育成のための資質・能力形成について、造形芸術系、自然・生態学系、社会科系の教員が集まって調査・分析し、文化や芸術を形づくる背景などについて幅広い視点で捉え、北方圏において地域社会を担う児童・生徒の資質・能力醸成につながる視点で整理し、学校教育との関係を明らかにしたいと考え、【科研費：平成 30、31、32 年度】研究課題「北方圏の風土を生かした資質・能力育成の基盤研究：北欧との造形教育交流と比較から」を申請し研究を進めることとした。

2. 研究の目的

(1) 日本の秋田とフィンランドのエスポーは同じ北方圏に所属していて、森林の文化、狩猟の文化、粘り強い気質など両地域の共通点がある。また島国と大陸、人口や国や教育の仕組みなど違う点もある。教育交流展を開催する取り組みを通してグローバルとローカルを比較することによって両国の生徒が自らの郷土のよさや価値に気付き、心豊かに生き、両国の文化を豊かにすることのできる人材の育成を目標に、北日本(秋田)やフィンランドなどの北方圏に共通する資質・能力があると考え、その北方圏の風土を生かした資質・能力を育成するための研究として北欧との造形教育交流等の交流実践実践を通して比較しながら実践研究を行い、造形教育のみならず、北方圏(寒冷地)の故郷を大切にしながら、地域で生きていく人材の育成に資することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 秋田を含む東北、北海道地域とフィンランドとの子どもたちの交流事業、調査を通して、北方圏ならではの、人材育成のための資質・能力について基盤研究を行うこととした。美術・工芸の教育を入り口として、風土や気候、生態系などから両国の児童・生徒に共通する気質や違いなどを調べ、北方圏(寒冷地)の故郷を大切にしながら、地域で生きていく人材の育成をめざす内容の研究である。分担研究者である秋田大学社会科教育講師：加納隆徳氏の助言で、社会科の先行研究註 1 の研究手法を参考にして実践を行うことにした。それは、一般的共通性として「北方圏に共通して見られる文化を学ぶこと」、もう一つは地域的特殊性として「北日本とフィンラン

ドに見られる差異を通じて、自己の地域を見つめ直すこと」という視点である。この2つの視点を行き来することで、国際交流を通して「相手国の文化や同年代の生徒に対する理解を深めること」、「ふるさとの文化や“自分”を深く理解すること」ができるであろうと考え、この後の実践では、この視点を意識して交流展に関する作品制作に対して、交流テーマや、交流方法、働きかけ、振り返りなどを意識することとした。(2)(1)と並行して、北方圏ならではの、人材育成のための資質・能力形成について、郷土や気質、冬や雪などに対する感じ方、造形教育以外の見方・考え方などの視点も加え風土に起因する基礎的な意識調査を質問紙により両国の生徒に実施する。それは(1)での展覧会開催に向けた作品制作を通じた資質・能力の分析に、質問紙の結果を合わせることにより、北方圏ならではの、資質・能力の輪郭をより鮮明にすることができると考えた。

註1：「社会科教育と地域 ―基礎・基本の理論と実践―」井田仁康 2005年 NSK出版

- ・座間味村における中学生の沖縄人としての意識、座間味人としての意識
- ・青ヶ島の子どものアイデンティティ、「青ヶ島の文化を残す意識」

4. 研究成果

(1) 研究実践の経緯

3. の研究の方法で挙げた、3. の(2)の質問紙により「北方圏ならではの人材育成のための資質・能力形成について、郷土や気質、冬や雪などに対する感じ方、造形教育以外の見方・考え方などの視点も加え風土に起因する基礎的な意識調査」については、新型コロナ禍の影響により、両国での同一内容での調査実施が途中で頓挫することになった。そのため、数値的な分析による裏付けが不十分な結果となってしまった。また、研究当初、造形芸術系、自然・生態学系、社会科学系の教員を研究者とし学際的な広がりを目指したが、新型コロナ禍を受けて、学際的な研究についても不十分な結果となったことは残念である。そのため3. の(1)の研究方法を中心にフィンランドと秋田の協力者（教諭）と共に実践を進めた。両国の教師が「故郷のよさを認識し、自己を深く見つめる」ことができるであろうと考える展覧会「テーマ」と実践手法を工夫し、生徒の取り組みを通じた経過と成果物などの分析を通して、教師側の取り組みに対する深化を検証した。教師の働きかけの工夫を受けて生徒の取り組みがある。教師として、前述の2つの視点を念頭に働きかけを工夫し、生徒に作品制作の活動の指導を行った。

(2) 研究実践の成果

研究実践を通して、両国の教師の取り組みが、2014年度より10年間継続しながら工夫を重ねてきたことは大いなる成果と言える。

① 教育交流展のテーマ設定の工夫（共通テーマ創出）

両国生徒が共通に取り組むことができるテーマ内容の設定を模索した。同じ北方圏の地域であるものの、郷土の捉え方や自然環境の違いなど両国で思っていることと実際にはズレがあっ

た。例えば、2019 年度のテーマは、「ふるさとへのまなざし ーくらし、自然、文化、祭りー」とした。これは日本側が主導してテーマ設定を行った。自然や文化に関する相手国に対して認識のズレや思い込みがあった。当初自然の中に湖沼と森林・山が入っていた。フィンランドには高い山が無かったり、(自然環境)日本のような郷土での祭りが無かったりするなど(郷土文化)。後にフィンランド側から指導の困難さを指摘されることがあった。それらの反省も踏まえ、両国の共通性と違い、育むべき能力などを十分協議しながら両国の生徒が興味を持って取り組める題材として2020年度は、相手国の文化財を自分達の価値意識で作品化する。2021年度はフィンランドテキスタイルパターンの特質を学びそれを生かして自分の主題で作品化する。2022年度は、相手の国を旅するというのを夢見ることで憧れを主題として作品化する。というように、アイデア創出時の十分な話し合いによって両国の生徒の学びが深まる魅力ある展覧会テーマ設定につなげることができた。

② 実践手法の工夫と成果

・SNSを活用したコミュニケーション

この交流展を通じた人間形成の取り組みは、ひとえにコミュニケーションを通じた、両国の教員・生徒同士の理解の活動に他ならない。2020年度から2021年度は新型コロナウイルスの流行により、対面でのコミュニケーションを図ることが難しくなったため、ICTを活用し遠隔地をつなぎ、会議やギャラリートーク・講評会などをSkypeやZoomを導入し、困難な状況を乗り切ることができた。作品制作の途中経過についても、グーグルドライブ等でやり取りしたり、デジタル画像データの交換に活用したりした。直接対話に加えICTの活用の有用性についてもコミュニケーションの深化に一役買っている。

・対面での直接的な交流講評会の実施

2020年度、2021年度は遠隔による作品講評会であった。2022年度は、2017年度ぶりにフィンランド人教諭4名が来日、直接的に文化交流が行われた。秋田側の生徒は、2年と3年生が参加した。2022年度と2023年度の自分自身の作品、フィンランド側の作品を展覧会前に学校に掲示し、直接的な文化交流ができた。生徒はパソコンの翻訳機能、通訳、自身の英語の能力も活用しながら、フィンランドの教諭に自身が制作した作品の解説を一生懸命行っていた。フィンランドの教諭からのフィンランド側作品に関する質疑にも積極的に取り組んでいた。

・博物館やフィンランドの専門家レクチャーによる深化

フィンランドを知るための講演会と演習、秋田県立博物館でのフィールドワーク型の演習を通して、両地域の共通性や違いを理解し、お互いに自分の地域の理解を深めることができた。

・指導の内容と方法の広がりや深まり

2021年度から、フィンランド側は普通高等学校に加え、職業学校が参加したことにより、美術分野の多様な専門性を持った教諭が加わった。そのことにより、陶芸による彫刻題材など多様

な技法が提案された。2022年度からは、フィンランドの高等学校の心理学担当教諭が指導に加わることで、美術分野に加え、心理学や民俗学的な視点での「鳥居をくぐって日本に入り込む」というような授業題材も生まれてきて、文化面での広がりや深さが加わった。日本側の指導では、2021年度は、フィンランドテキスタイルデザインの模写を通して、そのパターンデザイナーの創作精神やモチーフの特性を学び取った上で、それをふるさとや自分の題材として生かし、推敲を加えるという過程により深化を試みた。キャプションの内容についても、主題と造形の関係や相手国との比較の視点など、自らのコンセプトを簡潔に文章化することを通して、生徒自身の造形意識を深く見つめることができた。また、講評会において自分の言葉で説明したり、相手の国の生徒の作品の造形について質問したりする言語活動は自己の造形の根拠を明らかにする深い学びにつながった。

(3) 今後の展望

本実践での引用文献①(2020年)の査読者の論評でも「一前略一 グローバル化が進展している今日、地域の自然や伝統的な美術文化等を学ぶことは重要である。一方でそれが自国中心の偏狭なナショナリズムに接続すると文化や地域の多様性の毀損につながる懸念もある。そうしたなか、同じ北方圏の国との交流という広い枠組によって、自分の地域についての学びを深めることが同時に文化の国際的な多様性や共通性の理解にもつながっていくなど、この取り組みは非常に示唆に富む。一中略一 今後はその現代的な意味や可能性についても考察を加え、国境を越えた美術教育の連携を持つ大きな可能性を示す実践研究へと発展させていってほしい。(笠原幸一)」とあり、日本の美術教育界でも今後の研究実践の継続と深化への期待が示されている。さらに引用文献②(2024年)の査読者の論評では、「一前略一 これからの交流と秋田における工芸デザイン等の教育の発展を考えると、新たな展開を模索すべき段階にあるということもできる。」との指摘もあり、今後、後期中等教育の交流による郷土人材育成に留まらず、校種や活動内容を広げることも考え、所属する、秋田公立美術大学とフィンランドの大学の学生同士、教員同士の交流活動やフィンランドでの教育実習(在外地域での教員養成)なども模索しながら、北方圏の美術教育を切り口に人的交流を通じた地域人材育成に生かす資質・能力醸成の実践を踏まえた、学術研究に取り組んでいきたいと考えている。

<引用文献>

- ① 有馬 寛子、尾澤 勇、秋田&フィンランドの「視覚美術・工芸」教育交流展の実践研究報告 (3)-地域の共通性と相違性の視点でふるさとの文化を捉える-、日本美術教育研究論集 Japanese Journal of Art Education、No.53、2020、123-130
- ② 尾澤 勇、秋田&フィンランドの「視覚美術・工芸」教育交流展の実践研究報告(4)-教育交流展の変遷と取り組み内容の深まり-、日本美術教育研究論集 Japanese Journal of Art Education、No.57、2024、81-88

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 山内 貴博	4. 巻 Vol. 67 No. 4
2. 論文標題 場の固有性が生まれる要因を探る 街の風景に関するアンケートの比較（タビオラと秋田）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 BULLETIN OF JSSD Vol. 67 No. 4 2021 デザイン学研究	6. 最初と最後の頁 p. 51-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 有馬寛子 尾澤 勇	4. 巻 No.53
2. 論文標題 秋田&フィンランドの「視覚美術・工芸」教育交流展の実践研究報告（3） 地域の共通性と相違性の視点でふるさとの文化を捉える	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本美術教育研究論集 Japanese journal of art education	6. 最初と最後の頁 123-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 尾澤 勇	4. 巻 No.57
2. 論文標題 秋田&フィンランドの「視覚美術・工芸」教育交流展の実践研究報告(4)-教育交流展の変遷と取り組み内容の深まり-	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 日本美術教育研究論集 Japanese journal of art education	6. 最初と最後の頁 81-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 有馬寛子 尾澤 勇
2. 発表標題 秋田&フィンランドの「視覚美術・工芸」教育交流展の実践研究報告（3） 地域の共通性と相違性の視点でふるさとの文化を捉える
3. 学会等名 第53回日本美術教育研究発表会2019(令和元年台風第19号により口頭発表中止、論文にて代替え措置) 公益社団法人 日本美術教育連合
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 尾澤 勇
2. 発表標題 秋田&フィンランドの「視覚美術・工芸」教育交流展の実践研究報告(2) 高等学校相互交流展開催へのプロセス
3. 学会等名 第52回 日本美術教育研究発表会 2018
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 尾澤 勇
2. 発表標題 秋田&フィンランドの「視覚美術・工芸」教育交流展の実践研究報告(4)-教育交流展の変遷と取り組み内容の深まり-
3. 学会等名 第57回 日本美術教育研究発表会 2023
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 碓 勝貴,石山 正夫,伊藤 文彦,尾澤 勇,カイ・エドモンド,笠原 広一,近藤 康太,齊藤 暁子,佐藤 昌彦,徐 英杰,鈴木 美樹,張 月松,東條 吉峰,直江 俊雄,畑山 未央,前村 晃,宮崎 藤吉,宮脇 理,山木 朝彦,山口 喜雄,山田 一美,吉田 奈穂子,劉 叡琳,渡辺 邦夫,渡邊 晃一,和田 学	4. 発行年 2020年
2. 出版社 学術研究出版	5. 総ページ数 382
3. 書名 民具・民芸からデザインの未来まで 教育の視点から	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	佐藤 昌彦 (SATO Masahiko) (00281858)	福島学院大学短期大学部・その他部局等・教授 (41604)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	有馬 寛子 (ARIMA Hiroko) (00758766)	秋田公立美術大学・美術学部・助手 (21403)	
研究分担者	藤野 敦 (FUJINO Atsushi) (10741944)	国立教育政策研究所・教育課程研究センター研究開発部・教育課程調査官 (62601)	
研究分担者	山内 貴博 (YAMAUCHI Takahiro) (50713187)	京都美術工芸大学・工芸学部・教授 (34326)	
研究分担者	阿部 誠 (ABE Makoto) (70414357)	秋田県立大学・生物資源科学部・准教授 (21401)	
研究分担者	東良 雅人 (HIGASHIRA Masahito) (70619840)	国立教育政策研究所・教育課程研究センター研究開発部・教育課程調査官 (62601)	
研究分担者	加納 隆徳 (KANO Takanori) (90767245)	秋田大学・教育文化学部・講師 (11401)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	岸上 恭史 (KISHIGAMI Takashi)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	松田 明德 (MATSUDA Akinori)		
研究協力者	宮澤 豊宏 (MIYAZAWA Toyohiro)		
研究協力者	田中 真二郎 (TANAKA Shinjiro)		
研究協力者	黒木 健 (KUROKI Ken)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関